魔界の姫と緑園の王子【１】

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界の姫と緑園の王子【１】

【Ｎコード】
Ｎ４６５７Ｐ

【作者名】
優姫

【あらすじ】
時空のひずみにより人間界に行ってしまったルーン、そこで彼女は一人の青年と出会い恋をし、色々な人と出会う。そんな中彼女たちの事をよく思わない者達や彼女たちの敵となる者達と二人は戦う、二人の運命は！

魔界の姫と緑園の王子

「ねぇ母様？」
幼い姫君は母の膝の上から母を見上げ聞いた。
「どうしたの？」
母は幼い娘の頭を撫でながら聞いた。
「人間界ってどんなところ？」
それを聞いた母は少し黙った。が、少ししてから口を開けた。
「人間界とは、我々魔族が住む魔界とは異なる世界、魔法もないし魔物もいないわ、そのかわり剣や鞭、銃という恐ろしい武器を使って動物を殺したり、空気を普通に汚したりするの・・・。」
それを聞いた姫は恐ろしくなりそれ以上は聞こうとしなかった。

それから１０年後。

魔界の姫ルーンは人間年齢でいう１６歳になっていた。
「母様！母様！お倒れになったとお聞きしました！大丈夫！？」
ルーンは大慌てで母の部屋の扉を開けた。ベッドには母が腰を上げて座っていた。
「そんな大きな声を出して・・・。大丈夫よ。心配させてごめんなさいね。少しめまいがしただけですよ。」
魔界城王妃ルーシフは苦笑いで言った。
それから3日後容体悪化のためルーシフは天へ上った。

「ルーンはどうしている？まだ母を亡くした悲しみが癒えていないのか？」
魔界の王コルタンは従者に聞いた。
「はい陛下。姫様はまだお母上を亡くした事に悲しみを抱き毎日城の外に出ては城の周りにある森で泣いていらっしゃると小間使いの

小悪魔が言っておりました。」
従者の言葉を聞くとコルタンはどうにかして悲しんでいる娘を慰めてあげたいと考えていた。
ルーンが悲しいのはわかるがコルタン王も3人だった家族が2人になっただけではなく愛する妻をなくしたので深い悲しみにふけっていた。
「ところで陛下、少しお話をかえてもよろしいでしょうか？」
従者がそういうと王はうなずいた。
「最近魔界のあちこちで時空のひずみが観測されております。時空のひずみにより人間界に落ちてしまう住民が多数いるそうなのですが、帰って来たものは誰ひとりおりません。早く対処しなければ大変な事になるかと。」
王はそれを聞くと少し目を見開いた後考えこんでしまった。

城を出てすぐにある森の奥で泣いている少女がいた。髪は黄金に瞳は少し暗い青色をした年齢１６歳の少女だ。少女の周りには小鳥や子鹿といったいろいろな動物が彼女の心配をしていた。歴代魔王達は髪は黒に瞳の色も黒ではあったがルーンの父と母コルタンとルーシフは髪は黄金に瞳の色は美しい空の色だったコルタンだけは瞳は黒だった。特にルーンは今は亡きルーシフの若き頃と瓜二つでとても美しい美貌の持ち主なので動物たちにも愛されていたのだ。
１匹の小鳥がルーンの肩に止まると頬を軽く突いた。それにきずいたルーンは小鳥たちに心配させまいと涙をぬぐい笑顔を見せたが動物たちにはそれが無理の笑顔だということがばれていた。
「みんな心配してくれてありがとう・・・。でも、・・・私は大丈夫よ。母様は亡くなってしまったけど母様との思い出は消えていないもの。」
ルーンは動物たちに心配させまいとそう言った。その時だった。
何か強い気配のようなものが森の奥から漂ってきた。
「何かしら？何か嫌な気配を感じるわ。」

そう言うとルーンは森の奥に入って行った。そこには大きな鏡が宙に浮いていた、ルーンは鏡の前に立ちそこに写っている自分の姿を見た。その鏡はただ普通の鏡だった・・・そう思った瞬間！
ゴォォォォォォ！！！！という大きな音をたて鏡から強い風が出てきた、まるで何もかもを吸いこもうとしているように。
「な、何これ！？どうしよう！吸い込まれちゃう！防御張らなきゃ！」
ルーンは魔界の国で一番魔力の強い娘として生まれたがまだそんなに強い魔法は使えなかった。それを無理に魔法を唱えようとしたら・・・・。
ゴォォォォォ！！！という吸い込む風が強くなりいとも簡単にルーンは鏡の中へ入ってしまった。

もうどれくらい歩いただろう。少女は手に綱を結ばれ服はぼろぼろの衣を着せられ綱を掴んでひっぱっている馬に乗った男と歩いていた。
（私、もう何回買われたかな・・・。いろんな人のお屋敷に売られて乱暴に扱われて言うことを聞かなかったら乱暴されるかすぐにまた捨てられる。今度はいったいどんな人に買われるんだろう）
少女には売られる前の記憶がなかった、覚えていたのは「ルーン」という名前だけ。きづいたときには既に手には綱があり歩かされていた。そして、もう何回もいろいろなお屋敷に買われてはまた売られている。黄金の綺麗な髪も今では泥のついた痛みまくりのボサボサの髪型だ。何故か少女がいる国では人間達の髪は茶色か黒で瞳もそれにあわせた色の物ばかりだが少女ルーンだけは黄金の髪に少し暗めの青い色をした瞳の持ち主だった。屋敷の人間達はそんな彼女の髪と瞳がとても珍しいからといっていつも高値で自分を買っていくが自分が少しでも反抗するとすぐに暴力をふるいまた商人にルーンを売るのであった。
たどりついたのは緑が豊かな森の中の真ん中に静かにたたずむ綺麗

なお城だった。屋根は黄金色に輝いていて壁にはルビーでもはまっているのかと思うくらいに白く綺麗に輝いていた扉の周りには青い宝石のようなものが埋め込まれている。こんな大きな屋敷に住んでいるんだまた今までの人と同じで自分を高く買っては愛玩のように扱うか暴力振ってストレス発散の物のように扱われまた捨てられるのだとルーンは考え綺麗な青い色をした瞳を下に向けふせっていた。すると城の中から青年が出てきた。年齢はルーンより1つ2つ上くらいだろうかと思わせ顔はとても優しそうな面持ちの青年だった商人はルーンの顎を掴み無理に上を向かせると交渉に入った。ルーンは泣きそうな瞳を頑張って涙を流さず交渉を聞いていた。交渉が終わると。

「いいだろう。その娘私が買った。金額は好きな金額を言ってくれて構わん」

そういうと青年はルーンの腕を掴み城の中へ入っていった。中に入った後すぐルーンは1つのとても綺麗な部屋に連れて行かれた。ルーンを部屋に入れると青年は侍女に何やら話をして消えていった。ルーンが不思議に思うと部屋に侍女が何人か入ってきてルーンの綱をほどき彼女を風呂に入れ髪を洗い体を洗い元の綺麗な髪の色へと戻してくれた。風呂からあがると今度は赤いドレスのような服に着替えさせられ首には瞳と同じ青い色をした宝石の埋め込まれたネックレスをつけ頭にはピンクの花のついた髪飾りをつけられた。支度を終えると同時に青年が部屋へ入ってきてルーンの座っていた席の横に座ると侍女達が二人では食べきれないほどの食事をもってきた。食事中には踊り子などが踊りを披露しながら青年とルーンはそれを見ながら食事をしていた。だが、ルーンはこの後何をされるかが恐ろしく食べ物が喉を通ろうとせず何も食べないでいた。今までの人と同じで最初は優しくせっしてみてもしルーンが反応を見せなかったら怒って暴力にはしるに決まっている、とルーンは考えていたが青年はその後もルーンに何かするわけでもなくただルーンの好きなようにさせていたそれでもルーンは恐ろしくそれから3日飲まず食

わずを続けて部屋にこもりきっていると力つきたのか瞳を伏せ眠るように倒れてしまった。

「お願いだ。目を覚ましてくれ。僕はまだ君の声を聞いてもいないのにこのままさよならなんかしたくないよ。君はとても小鳥のようにかわいらしいんだきっと声は小鳥の歌声のような清んでいてとても綺麗な声のはずだ。僕は君が目覚めるまでずっと待っているよ」

ルーンが夢を見ているとそう、誰かが言っている声が聞こえてきた。この声には聞き覚えがあった、自分を商人から買ったあの青年のものだ。

少ししてからルーンが目を覚ますと手を強く握られている感触があった。ルーンは体を起こしその感触のする方を向くとベッドの横にある椅子に腰をかけベッドを枕にルーンの手を握りながら疲れきって眠っている青年の姿があった。ルーンの気配にきづいたのか青年はふと目を開け体を起こしているルーンを見ると「おはよう」と声をかけてくれた。ルーンは今までいろいろな屋敷に売られいろんな目にあってきたがこんな事をしてくれる人は初めてだった。

「ど・・・して？」

ルーンは声を頑張って出し聞いた。

「どう・・・して？私を買ったんでしょう？買ったのになんでこんな事したりこんな服とかくれたりするの？」

ルーンは内心怯えながらに聞いてみた、すると。

「あ～ごめん。勘違いさせてしまったね。確かに僕は君を買ったけど別にどうにかしたい訳じゃないんだよ？ただ会った時の君はとても悲しそうな目をしていてほっとけなかったんだ。だから体調取り戻したら城を出て好きなところへ行っていいよ。」

と青年は優しく微笑みかけてくれた。

「行くとこなんか・・・ない・・・。私には売られる前の記憶がないんだもの。」

ルーンが泣きながら言うと青年は泣いているルーンを抱きしめた。

ルーンは一瞬ビクッと震えてしまった。すると、
「それなら、ここにいればいい。ここを君の家だと思ってくれて構わないよ。僕が君を守ってあげる。」その言葉を聞くとルーンは青年の服を掴みうなずいた。

こうして青年とルーンのお話は始まった。

魔界の姫と緑園の王子

人間界の緑が豊かな国の森の真ん中に綺麗なお城があった。そこには主の青年と青年が商人からもらいうけた少女ルーンが住んでいた。

「そういえば！自己紹介をまだしていなかったね？僕の名はヴィル年齢は１９歳になったばかりだよ。この屋敷の主も僕だ。」
彼はそういうとルーンの寝ているベッドから離れ椅子に座った。
ルーンは涙をぬぐうとまだ恐ろしいのか少し覚えた表情で言った。
「ルーン・・・覚えてるのは名前だけ・・・。」
ルーンがそういうと。
「ルーンか、とてもいい名前だね。かわいらしくて小鳥みたいだ。君の名前にはぴったりだ！ルーンの名前を考えた人はきった君をとても愛していたんだろうね。」
ヴィルがそう言うとルーンは驚いたように目を見開いた後頬を紅く染め布団にもぐってしまった。

その日の夜も食事をする時ルーンは何も口にしなかったが、それを見たヴィルが
「ダメだよ？何か口にいれなきゃまた倒れてしまうからね！少しでもいいから何か食べておくれ」
そういうとフルーツの皮をむきルーンの口元へ持っていった。ルーンがおそるおそる口をあけるとヴィルはそれを口の中に押し込んだ。ルーンは怯えながらも口を動かしフルーツをかむとヴィルはほっとしたような顔をして
「いい子だね。そのちょうしでもっともっと食べていいんだよ。ここはもう君の家なんだからね。」
その後もヴィルはルーンに何もせず、ただ普通に話しかけてきたり何も覚えていないルーンにいろんな楽器のなら仕方などを教えてく

れた。特にヴィルは琴が好きなのかよく琴を鳴らしておりそれを彼の横で座りながら不思議そうにルーンが見ているとヴィルは琴をルーンに渡し彼女の後ろに座り彼女の手も持ち琴に触らせ琴を弾かせていった。彼女が間違えると叱りもせずそのまま続けて弾きうまく弾けると

「うまいじゃないか！そうそう！これはこうやって弾くものなんだよ。」

とヴィルは言う、と。

ルーンは嬉しくなり少し笑みを浮かべた。だがそれは無意識のことだった。

「！？ルーン！今、君笑って・・？」

ヴィルがそういうとルーンは口元を抑え

「・・・・へん・・・・？」

と聞いた。が、かえってきた言葉は

「いや、可愛いよ。やっと君の笑顔が見れたね。もっともっとその可愛い微笑みを見せておくれ。」

彼がそう言うとルーンは頬を紅く染めてしまった。

ルーンとヴィルはそうやって毎日を過ごしていたがルーンにとって夜はまだ怖いのであった。いろいろな屋敷に買われていた時は夜は特に怖かった。寝ているとベッドがいきなりきしむ音をたてるので半分眠っている目をあけると屋敷の主がベッドに乗っていて暴力的な事をそのままの体勢でしてくることがあったからだ。

でも、ヴィルはそんなことする人じゃないわ。大丈夫よ。と思い寝室に戻ろうとしたら

「そういえば、ルーン？ちゃんと寝れていないのだって？体に悪いからちゃんと寝なきゃ・・・。」

彼はそう言っていたがルーンは苦笑だけ見せて寝室に入った。

風呂を済ませ着替えてベッドに入るとノックが聞こえた。

それを聞いたルーンは恐ろしくなり覚えた声でノックのした扉の方を見て返事をした。

「・・・はい・・・・」
すると開いた扉の前に立っていたのはヴィルだった。ルーンが怯えて泣きそうな顔をしてるとこを見たヴィルは
「か！勘違いしないで！？君が思ってるようなことをしにきたんじゃないからね！？」
そういうと扉を閉めベッドに近づき彼女の布団の中に入ってきてルーンを横抱きにして言った。
「い、言っとくけど。僕にとったらこれは生き地獄なんだからな！君みたいに可愛いくて守ってあげたくなるような子を目の前にしたらいくら僕だって我慢が大変だよ。でも、もし僕がこうやって寝て朝まで君に何もしなかったら君は安心して毎日眠れるようになるだろ？」
そう言うとヴィルは寝息をたて眠ってしまった。
最初は怯えていたルーンも落ちついて眠っているヴィルを見ているとウトウトしてきたのかすぐにヴィルと同じく寝息をたてて眠ってしまった。

朝起きると既にヴィルの姿はなくなっていた。
ルーンが体を上げるとそれを待っていたかのように侍女が数名部屋に入ってきてルーンがベッドから起きるのを手伝い、服を着るのを手伝い髪を結んでくれた。結んでいる最中に一人の侍女が言った。
「ルーン様？昨日はどうでした？よく眠れましたでしょう？最近眠れていないようだったので私たちがヴィル様にその旨をお伝えしておきましたのよ。ヴィル様はとても優しい方ですよ。私たちが少しでも仕事を間違えても叱らずにいてくださいますもの。」
「ヴィル様は虫も殺せないほど優しい方なのですよ？？？」
と、一人の侍女が話していると横にいた侍女も答えた。
どうやらヴィルは侍女たちに好かれているようだ。
侍女たちの話を聞きルーンは１つの疑問をもった。
着替えを終わらせるといつもどおりルーンの部屋にヴィルが入って

きたのでルーンは聞いてみた。
「ねぇ？ヴィルのお仕事はなに？」
そう聞くと一瞬ヴィルの顔が曇ったようになったがすぐいつもどおりの表情の見せ言った。
「僕は、この国の領主でありこの城の主だが、本当はこの国にいる存在じゃないんだ」
「存在じゃない？」
ルーンがそう言うとヴィルはうなずき言った。
「僕はこの国から南にあるラングールという王国の王の二番目の子として生まれたんだよ。」
ヴィルがそういうとルーンはしばらく考え考え終わるとおどろいたように言った
「王の子って事は王子様！？」
前にヴィルが読んでくれた絵本の中にもいたお城の王子様だ、と思った。でもそれを聞くとまた疑問が浮かび上がってきた
「王子様が何故ここにいるの？？？」
ルーンが聞くと今度こそはっきりとわかるようにヴィル表情が沈み
「ラングールは今亡き父の代わりに第一王子のマーリフ兄上が納めているんだ。兄上はとても優しい人で祀りごとにも出席していろんな人達の意見を聞いて国の事を第一に思ってくれる人だった。去年までは」
ルーンが不思議そうに首をかしげるのを見るとヴィルは微苦笑をし、ルーンの頭を撫でてから言葉をつづけた。
「何かがあったってこともないんだ、本当にいきなりだったんだよ。兄上はかわってしまった、祀りごとに参加してもみんなの意見は聞かず独断で話を進めて、悩みを持って城へ来た人々を兵に言って取り押さえ牢に入れるか城から追い出すかしかしないんだ」
ヴィルがそういうとルーンは身の毛がざわつくのを感じた。そして
「僕はそんな兄上が見ていられなくてこの離宮に来ることにしたんだよ。僕は第二王子でありながら民を見捨てて逃げてきてしまった

んだ・・・・。」
ルーンはそれを聞くとヴィルの手を握り慰めの言葉が苦手だったのでヴィルの黒い瞳を一生懸命見つめた。そのことにきづいたのかヴィルはルーンの頭をまた撫でては笑顔を浮かべてくれた。
「慰めてくれるのかい？君はとても優しい子だね」
それを聞いたルーンは嬉しくなり、頭を撫でられながら頬を紅く染めて微笑んだ。

魔界の姫と緑園の王子

「ルーンはどこだ！！！ルーンはいないのか！」
その時の魔界では魔王コルタンが姫の魔力を感じられず探しまわっていた。
「へ、陛下！落ちついてください！ただ今兵が姫様をお探しになっております。」
従者がそういうとコルタンが言った
「落ちついていられるか！そんなこと言っておきながらもう何時間たったと思っておる！私自ら探したほうが早いわ！」
人間界ではもう1月はたっているが魔界ではまだ三日の話しだった。
従者が慌てふためきながらに魔王を納めようとすると思いついたように言った。
「陛下。水鏡を使ってはどうでしょう？？水鏡ならばどこの世界にいようと探し物を見つけてくれるはずです。」
従者がそう言うと
「おお！そうであったな！わしの従者は知恵が働くのぉ。わしも嬉しいぞ。」
そう言いながら大声で笑っていた。従者はその言葉を聞くとすぐ魔法を使い水鏡を出し魔王に渡した。
すると水鏡が揺れ始めそこにはヴィルの隣で笑っているルーンが写った。
「誰だ！こやつは！？もしや我が姫をさらった物ではあるまいな！」
魔王がそう言うと水鏡を除いた従者が慌てながら言った
「へ、陛下！違います！この男人間であります！」
王はそれを聞くと驚き目を見開いた。
「なんだと！？それではもしや人間がこちらの世界に来ているのか！？探せ！探すのだ！我が姫を探し出すのだ！」

王がそういうと従者は慌てて走って王の間を後にした。

その時ルーンはヴィルと城を出て少ししたところにある湖で遊んでいた。
正確にはかくれんぼをヴィルとルーンと侍女達とでして遊んでいた。
ヴィルが鬼になるとルーンは悲鳴をあげながら走って林の中、木の後ろへ隠れたルーンの後ろには暗い闇が広がっていた。
走り疲れてかルーンは木の陰で息を切らしていると・・・。
『・・・・・・んで、・・・・・・んと・・・・・・の？』
「え？」
後ろの暗闇から声がして振り返ったが後ろには誰もいなかった。
不思議に思ったルーンが声を出そうとすると。
「ルーン見つけた！」
とヴィルが木の前からひょっこりと顔をのぞかせてきた。
ルーンは後ろを振り向き戸惑いの表情でヴィルを見るとそんなルーンの表情にきずいたヴィルは
「どうしたの？あ、疲れちゃった？ここにきてずっと遊んでいたもんねー。もう暗くなってきたし城に帰ろうか。皆がルーンの好きなものたくさん作って待ってるよ。」
と言いながらルーンの手を掴みルーンを馬のとこまで連れて行く。
ルーンが馬に乗るとその後ろにルーンを抱き寄せるようにヴィルが馬にまたがり手綱を引く。ルーンはまだ不思議そうに林の方に目をやっていた。
その日の夜中、どうしてもあの声の主が気になったルーンは寝静まった城を抜け出しあの湖に行こうとしていた。
「申し訳ありません。王子お目覚めください。」
侍女の言葉に目を覚ましたヴィルは侍女に聞いた。
「なんだ？こんな夜更けに、何があった？」
「はい。見回りをしていましたらルーン様の部屋の扉が少し開いていまして、中をのぞいたところルーン様がどこにもいらっしゃらな

かったのです。」
それを聞いたヴィルは目を見開き言った。
「なんだと！？城の中は探したのか！？」
「はい。くまなく探しましたがいらっしゃらず。もしかしたら外に出られたかもしれません。」
「馬を出せ！探しに行くぞ！昼間と違ってこの時間は夜の動物達が活動しているんだ！」
ヴィルはそう言うと寝着のまま上に上着をはおり部屋を後にした。
その時ルーンは城を出たことを後悔していた。
ルーンは商人とあの城へ行ってからまだ一度も一人で城の外へ出たことがなく、案の定森の中で道に迷ってしまっていたのだ。ルーンが困りはててその場に座りこむと・・・・。
アォォォォ～～～～～ン！！
という鳴き声が聞こえてきた。ルーンはなんの鳴き声かわからず震えたそして頑張って立ちあがり（外に出なければ！）と考えながらに前に進んで行った。すると目の前に息を切らしている黒く毛の生えた動物がいることにきづいたルーンにはその動物がなんという名前なのかがわからない理由は記憶をなくしてからヴィルに教わっていたのは絵本を読んでもらったりしていただけだからだ。ルーンは怖くなり後ろに逃げようと振り向くと後ろにも同じ姿の動物がルーンを見つめていた。ルーンは怖くなり
「ヒッ・・・ク。ヒック。ヴィル・・・・ヴィルーーーー！！！」
と泣きながらに声を張り上げヴィルを呼んだ。
その時馬にまたがり森の中を走っていたヴィルはルーンの声に気付き声のする方に馬を走らせた。走らせた先にいたのは狼の群れに囲まれたルーンだった。
「ルーン！！」
ヴィルは馬を降り城から持ってきた剣を上げ狼たちに向かって走って行き自分が通れるだけの道を開けるとルーンの傍まで行った。
「ルーン！大丈夫かい！？」

ヴィルがそう言うと安心したようにルーンは
「うん！！ヴィルありがとう！」
「礼は後だよ！」
と言い剣を構えると、先ほどより引数の増えた狼がルーンとヴィルを囲んでいた。
（この数では僕一人では無理だ・・・。ルーンだけでもどうにかしないと・・・。）
そう考えるているとヴィルの足元にいるルーンが
（このままじゃヴィルまで怪我しちゃうの？？私のせいで？？そんなの嫌！ヴィルは私に優しくしてくれたの！怯えていた私を慰めてくれたの！ヴィルは私のたった一人の家族なの！ヴィルに何かあったら私・・・・）
と思った瞬間狼の１匹が飛びかかってきた。すると。
「だめぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
とルーンが目を閉じさけぶと、まばゆい光が二人を包んだ。
ヴィルは何が起こったのか分からず目を瞑る、そしてゆっくり目を開けると目の前にいたはずの狼の群れは姿形なくなっていた。ヴィルは驚いたようにルーンを見るとルーンの周りがまだうっすらと光輝いていた、そして光がが消えると同時にルーンが目を開けると
「え？ヴィル？さっきの動物さん達は？」
ごく普通に何があったのかさっぱりわかっていないルーンを見たヴィルは驚きより、ルーンが無事だったことのほうに安心をしルーンを抱き寄せた、そして
「何故こんな時間に外に出たんだ！城の皆も僕も心配したじゃないか！君はまた商人につかまりたかったのか！」
とヴィルが声をあげて言うと
「ご・・・ごめんなさい。湖に行きたかったの・・・・昼間誰かに話しかけられた感じがして気になって・・・嫌っちゃ嫌・・・ごめん・・・なさい・・・もう行かない・・・もう行かないから・・・」
と泣きながら言うルーンを見たヴィルは

「違う、違うんだ。怒っているんだじゃないんだよ。泣かないでおくれ。」
そう言ってまたルーンを強く抱きしめた。
ルーンが泣きやむとヴィルはルーンを馬に乗せ馬の手綱を持ち今度はヴィルは地面を歩いて城に帰った。

魔界の姫と緑園の王子

城の門を通る頃ルーンは疲労でか眠気が襲ってきてウトウトしていた、そんなルーンを見たヴィルは微笑みながら
「・・・まったく困った娘だなぁ。いい子だからもう少し我慢するんだよ？ルーンもう少しで着くからね」
そう言うとルーンの手を自分の肩に乗せルーンを抱き上げるとそのままルーンの寝台まで運んでくれた。そのまま彼女をベッドに寝かせると毛布をルーンにかけルーンが眠っているのをしばらく見つめていた。
ルーンは目を瞑ってはいたがまだ眠ってはいなかった。ヴィルに毛布をかけてもらった感触を感じた後本当に眠りそうになると
「！？」
いきなりルーンの唇に何かを押し当てられたことに気づきルーンは目を覚ました。目の前にはヴィルの顔があり自分の唇に押し当てられた物がヴィルの唇だと言うことに気がついた。
（これって・・・・キス？キスって確か絵本の中で王子様とお姫様が思いを伝えあった後にするものなんだよね？？？なんでヴィルが私にキスを？？）
ルーンがそう考えているとヴィルの唇が離れ目を開けた、そしてルーンも目が覚めていることに気づくとヴィルの頬は紅く染まり自分の唇の部分に手をやりいきおいよく起き上りルーンに背を見せた。
「ヴィル？今のって・・・？」
ルーンがどういうとヴィルは何も言わず部屋を出て行ってしまった。次の日の朝、朝食の時間になってもヴィルはルーンの部屋には来なかった、いつもならヴィルは朝食の時間も昼食の時間も晩食の時間も必ずルーンの部屋で食事をしていたのに。
（避けられてる？）
ルーンはそう考えたがそう考えるには早いと思った・・・が、それ

から三日がたってもヴィルはルーンと食事をしようとしなかった。
食事だけではなくいつもならルーンの部屋で絵本を読んでくれたり琴を教えてくれたりするはずなのにそれもしにこないかった。
ルーンは段々苛立ちと不安を覚え読みかけの絵本を持ってヴィルの部屋の扉を開けた。
「ヴィル！絵本の続き読んで？」
そう言いながらヴィルに絵本を差し出すと机に向かってため息をもらしていたヴィルはルーンの方を見て
「侍女に読んでもらってくれないか。僕じゃなくても別にかまわないだろう。」
そう言うと席を立ち部屋を出て行こうとした。ルーンはすかさずヴィルの腕に抱きつくと
「どうして！！？？どうしてそんなこというの！！？どうして私を避けるの！？あの夜私が目を開けたから！？開けたから怒ってるの！？もう・・・私の事いらなくなっちゃったの！！？私、また商人に売られちゃうの！！？？」
ルーンが泣きながらヴィルにそう言うと
「違う・・・違うんだ・・・」
苦しそうな顔をしながら前を見据え頭に手を当てヴィルがそう言うと今度は思いきったように言ってきた
「僕は・・・僕は君を・・・愛してしまったんだよ・・・。」
「え？」
ルーンは意味がわからなく問いかえした
「僕は・・・君の事が好きになってしまったんだよルーン。」
その言葉を聞いたルーンの心の中では疑問と喜びが生まれた
「だからって、何故避けるの？？」
ルーンがそう聞くと
「君は記憶をなくしているだろう？そして君のような見た目は美しく綺麗で、でも中身は幼い子供のような・・・こんな可愛い子だ恋人がいないほうがおかしいんだ。それに好きになったからといって

君にキスなどをしてしまっては今まで君を買った人達と同じ事をしているように感じてしまってね。」
ルーンがそれを聞くと両手を上に上げヴィルの頬を手で触り少し下を向くように力を込め、ルーンは一生懸命背伸びのしてヴィルにキスをした。
「!?ルーン!?何をしているんだ!キスがどういったものなのか君もわかっているはずだよ!?」
そう言いながら驚いたように目を見開いたヴィルは両手に力を込めルーンを自分から離した。
「なんでそんな事いうの!?記憶をなくしてても今私がいるのはここでしょ!?記憶なんか関係ないわ!私も、私もヴィルの事が好きよ?それじゃあいけないの???」
ルーンのその言葉を聞いたヴィルは驚き目を一瞬見開いたがすぐ元に戻り悲しげな顔をして聞いてきた
「それは・・・本当かい?本当に君も僕を・・・?」
否定されるに決まっているという表情で彼は彼女を見てそう聞いた。
ルーンは
何も言わずヴィルの瞳をじっと見つめた言葉ではなく瞳の中に答えを見つけてほしかったのだ。
すると一瞬ヴィルの身体が震えた。と、思ったらいきなりヴィルはルーンに口づけをしてきた今度は夜のようなものではなく深い魂を揺さぶるような口づけを、その口づけにルーンは最初驚いていたが次第に教えられたわけでもなくヴィルの腰に手を回しそのキスを許したのであった。

魔界の姫と緑園の王子

お互いの思いが通じあった二人はまた今までどおりの生活に戻った。

ある日、ルーンがヴィルに絵本を読んでもらっていると

「ルーン・・・いきなりだけれど話があるんだ。」

ヴィルはいきなり真面目な表情を見せルーンに話かけてきた。

ルーンは不思議そうにその言葉に答えヴィルを見つめると

「僕は城に帰って兄上をなんとかしようと思うんだ。兄上の何もかもがかわってしまってから僕は逃げるようにして城を出てこの離宮に移り住んだけれどルーン、君と出会って守るべきものができて初めて勇気をもつことができたんだ。民のため、ルーンのため、そして城に住むものたちのためにも僕は兄上と戦わなければならないんだ。だから君は・・・。」

ヴィルが話を言い終わらない間にルーンがヴィルの服を掴み真剣なまなざしをヴィルに見せた。それを見たヴィルはため息をつき諦めたように言った。

「わかったよ。一緒にきておくれ。君の事は僕が必ず守るよ。」

そしてヴィルはルーンの頬に手をあて唇を近付けようとすると！

「姫から離れろ！人間め！」

そう言い騎士のような服を着た物たちが何もないところから姿を現した。現れた騎士たちが道を作るとまた何もないところから額に紫の宝石の埋まった装飾品をぶら下げている男が現れた年は３０代後半くらいであろうか、長い黄金色の髪がとてもきれいだった。その男はどこかルーンと似ているとヴィルは思った。すると

「このようなところにいたのかルーン探したぞ。さぁ、我が城へ帰ろう。」

男はそう言いルーンに手を差し伸べたがルーンはわけがわからずヴィルの背に隠れた、ヴィルもルーンを背に隠すように彼女の前に立

つと
「何をしておる？我がわからぬのか？・・・もしや記憶が？」
男はそう言うと後ろに控えている男に視線を移し控えている男が返事をしルーンに近づきルーンの額に手をかざした。するとその手から光がこぼれ出しそれは一瞬のようにして消えたすると
「と・・さま？」
ルーンがそういうとその言葉にヴィルは目を見開き
「ルーンに何をした！？」
と男に言うと
「記憶をなくされていたので思い出させてさしあげただけです。」
男はそう言うとまたさきほどの男の後ろに移動した。
「我が名は魔界の王コルタンである。ここにいる娘は我が娘ルーン。ある日突然姿を消したルーンを我はずっと探し続け今ようやっと見つけたのだ。娘はかえしてもらうぞ。」
「魔界・・・の姫？ルーンが？」
コルタンが言った言葉を聞きヴィルは目を少し見開いて小さく聞いた言葉を言い返した。
ヴィルがそんな状態の間にコルタンはルーンの傍まで行き娘の腕を掴みひっぱって行く。
「ま、待って！父様！私帰るなんて一言も！」
そういうとルーンは力づくで足を止めるが
「何を言う？お前がここに残る理由なんてないであろう。」
コルタンがそう言うとさきほどより強く腕を掴みルーンをひっぱり何もない空間に向かって歩きはじめると、その時何もない空間から光があふれだしコルタンひきいる兵と控えていた男とルーンは光の中に姿を消した。

「やっと・・・やっと帰ってきたな・・・。ルーシフだけではなくお前までなくしたと思うとわしは・・・お願いだ・・・もう・・・もう・・・わしの傍を離れないと約束しておくれ・・いいね？」

コルタンはそう言うと怒りを表していた表情を緩めルーンを強く抱きしめ拒否権はないというような言葉をルーンに言った。
（そっか・・・・記憶取り戻したわ・・・私は母様を亡くして悲しくて森で泣いていたら不思議な鏡に吸いこまれて人間界に行ってしまい商人に捕まってしまったんだったわ・・・商人に捕まった後はつらい事ばかりあって私は記憶をなくして・・・母様がお亡くなりになった後すぐに私が消えてきっと父様も寂しかったのね・・・そうよね・・・もう私たち家族は二人だけになってしまったのですもの・・・）
「はい・・・父様。」

今はもうシーンと静まり返ったルーンの部屋でヴィルはまだ今起きた事が現実なのかどうか信じられずにいた。何もない空間から人が現れたと思ったら自分は魔界の王魔王だと告げて自分の娘だというルーンを連れてまた何もない空間に消えていってしまったのだ。
何が起きたのか頭の中を整頓していると部屋にノック音が響いた。
「ヴィル様？今さっき何か騒がしいほどの音がなさいましたが何かございましたか？・・・・あら？ヴィル様？ルーン様がいらっしゃいませんが・・・」
侍女にそう言われやっと今の状況がどんな状況なのかきづいたヴィルは悲しそうな表情を見せ下を見ながら
「ルーンなら帰ったよ。今しがたルーンの父と名乗る方が来て連れて帰った。」
ヴィルがそういうと侍女は驚いたように言った
「まぁ！お返しになさってしまったんですか！？」
「何故だ？」
驚いている侍女にヴィルは聞いた
「私はてっきりヴィル様はルーン様をお妃様にするおつもりなのかと思い今までもそのようにおそばでお世話をしていたのですが」
（あぁ・・・僕もそう思っていた、今は兄上の事があってそういう

ことはまずもって考えられないが、いつか・・・いつか兄上が優しい方に戻って国が平和になったら、その時はルーンに妃になってくれと言うつもりだった。だが、致し方ないだろう・・・ルーンの家族が・・・ずっと記憶をなくして家族の事を思い出せず悲しんでいたルーンの父親が迎えに来たのだ、それを自分の勝手な事情で押さえつけることができるものか）

ヴィルはそのまま侍女に返事をせず黙りこんだ。

（だが、私はルーンと出会った事を間違いだとは思わない。私はルーンから勇気をもらったのだ）

そう思いヴィルはいきなり勢いよく立ちあがり侍女に言った。

「城に帰る！支度を頼む！」

その時魔界では、ルーンは城の庭にある噴水のところで小鳥達と一緒に花を見ていた。だがその瞳は花ではなく別のものを見ているようだった。

（ヴィルは今頃どうしているだろう・・・一緒にお城に行くって約束したのにこっちに帰ってきちゃった・・・ヴィル・・・ヴィルに会いたい・・・）

まだコルタンと約束をしたばかりだというのにルーンの頭の中はヴィルの事ばかりだった

「姫様？泣いてらっしゃるのですか？」

後ろから久しぶりに聞いた女性の声がしたルーンはその言葉の意味がわからず自分の頬に触ると濡れていた。ルーンは泣いていたのだ自分でも気付かずにそれを見た侍女頭のイリアナはルーンを心配して声をかけてくれたのだ

「姫どうなさいました？もし何かあったのでしたらこのイリアナにお話をお聞かせくださいませんか？」

イリアナはそういうとルーンに頭を低く下げた。ルーンは人間界に落ちてしまってからの事、ヴィルと会ってからの事、ヴィルをどう思っているのか全てをイリアナに話した。

「それでは姫様はその方の事を愛していらっしゃるのですね？」
イリアナがそう尋ねるとルーンはゆっくりとうなずいた。
「そうですか・・・姫様はその方の元に帰りたいとお望みですか？」
イリアナにそう聞かれるとルーンはまたもやゆっくりとうなずきそして言った。
「帰りたい・・・ここも私の家だけど・・・ヴィルのいるあの城も私の家なの・・・私は・・・ヴィルの傍にいたい・・・でも、父様を悲しませたくない。今や魔界の王族は私と父様だけになってしまった私は父様を置いてはいけないわ・・・。」
ルーンがそう言うとイリアナはルーンをそっと抱きしめた
「馬鹿ですね、魔界の王族は確かにお二人だけではありますが城のメイドや従者はなんだとお思いですか？ただの雇われ人ですか？残念ながら私はそうは思いません。私は城で働いているもの全員大切な家族だと思っております。王には私どもが着いておりますけっして一人ではございません。それに姫様はご存知ですよね？魔界の住人は人間とは違い長生きです王族である姫様や王ほど長くはありませんが軽く４００年は生きていられます。ですが人間は頑張っても１００年が限界・・・ならば姫様が今しなければならない事は１つです。その方の傍へ行きその方が死して天へ行かれるまで一緒にいてあげてくださいませ。」魔界の住人は寿命が長かった王族以外のものは４００年生きるが王族は何万年も生き続けると言われている。
イリアナはそう言うとルーンの背中を軽く押した。ルーンはそのままイリアナの方を見るとイリアナはルーンを見てうなずいた、するとルーンは決意したように一瞬にしてその場から消え王の間へ姿を現した。
「父様！お話があってまいりました！」
ルーンがそう言うと
「ルーンか？どうした、そんなに慌てて」
コルタンは微笑みながら聞いた
「父様、私あの方の元へ行きます。」

ルーンがそう言うと微笑んでいたコルタンの表情が険しいものへとかわった
「あの方？あの方とはもしやさきほどの人間の元か？お前自分が何を言っておるのかわかっているのか？」
コルタンがそう言うと
「わかっております。父様、私は・・・私はあの方を愛しているのです。だから私はあの方の傍に戻りたいのです。お願いです、ヴィルの元へ行く事をお許しください」
「ならん！ならんぞ！魔族が人間と愛入れようなど私は許さんぞ！・・・そうか・・・そうなのか・・・フフ・・・わかったぞ、ルーン、お主だまされておるな？あの人間に何を言われた？許せん・・・許せんぞあの人間！殺してやる殺してやる！ルーン！お前もくるのだ！」
そういうと一瞬のうちに玉座からルーンの傍へ行き腕を掴み何もない空間に手をかざすとまたもや光が漏れ出しルーンと王は光の中へ入っていった。

その時ヴィルは机に向かい座って考え事をしていた
（ルーンは今頃どうしているだろう？父と一緒にいるんだ、もう寂しくはないはずだよな。）
ヴィルがそう考えていると
『お前が娘をだましているというヴィル王子か』
とさっきまで聞いていたはずの声がどこかから聞こえてきた、すると自分の背後の何もない空間が光輝いていることにきづき後ろを振り向くとそこにはさっきまで自分の目の前にいたはずのルーンとその父、コルタンが立っていた。
「何故、あなたがここに？ルーンまで・・・。」
ヴィルがそういうとコルタンは何かに反応したように一瞬眉を吊り上げ掴んでいたルーンの腕を放し一瞬のうちにヴィルの前へ移動しヴィルの首に手をあて壁づたいにヴィルを上に持ち上げた。
「父様やめて！なんでそんなことをするの！？」
ルーンが叫ぶと
「お前は黙っておなさい！さあ、言え！ルーンになんと言って言い寄ったんだ！」
コルタンからそういわれると息をするのがやっとのヴィルは喉が渇いたような声で言った
「言い寄った・・・？おっしゃっていることがわかりかねます・・・。僕は純粋にルーンを愛しているのです。」
ヴィルがそう言うとコルタンは手に力をこめた、するとヴィルから小さい声で唸りのようなものが聞こえルーンが慌ててコルタンに言った
「やめて！殺さないで！その人だけは殺さないで！もし・・・・もし・・・！殺したら私父様とは一生話さないから！」
ルーンがそう言うと

「はっ！わしと話さぬだと？嘘を言うのは・・・」
ルーンの方に振り向きながらにそう言うとコルタンはヴィルの首にある自分の手の力を弱めヴィルを下に下ろした、ルーンの瞳には一瞬の迷いもなく強いまなざしでコルタンを見つめていたのだ、それを見たコルタンはルーンに近づき肩を爪が食い込んでしまうんではないかと思えるくらい強い力で掴んで揺さぶった
「な、何故だ！なぜ人間なのだ！お前は・・・お前は・・・わしを一人にするのか？ルーシフを亡くしそれだけではなく愛する娘であるお前までわしのそばを離れるのか？！」
コルタンがそう言うと、また何もない空間から光が現れたと思ったら従者が現れた。
「陛下、失礼ですが話は聞かせていただきました。私の考えではルーン姫様は本気のご様子。陛下も知ってのとおり人間は長くて１００年しか生きられません。もうすでに１０００年生きていらっしゃる陛下や４００年生きてらっしゃる姫様とは寿命が違います。なので姫様はすぐ帰ってくることになると思われるのですが。」
従者がそう言うとルーンの肩を掴んでいたコルタンの手が離れていった、そして
「・・・いいだろう。どうせたった１００年だ。だがな！もしルーンに何かあるようならすぐにでもルーンは連れて帰るぞ！」
コルタンがそう叫ぶと
「はい、ルーンは僕が命と引き換えにしてでも守ります。」
その言葉を聞くと返事もせずコルタンは従者と光の中へ入っていった。

コルタンが消えるとシーンと部屋に静けさが戻り、ルーンとヴィルはお互いの顔を見合わせ
「ルーン！！」
「ヴィル！」
そういって名前を呼び合いお互いを強く抱きしめた。

「ああ、ルーン！帰ってきてくれたんだね？！本当に帰ってきてよかったのかい！？本当に僕と一緒にいてくれるのかい！？」
ヴィルがそう言うと
「ええ、帰ってきたわ！私の家はここだもの。ヴィル会いたかったわ！」
離れていたのはごく数分のことだったが二人にとってはかなり長い時間だったのか抱きしめあうと心が落ち着くのがわかった。
言葉を交し合うと二人は深く口付けをしあうのであった。
騒ぎをききつけた侍女が部屋までくると部屋の扉が少し開いていたのでそこから除くようにして部屋の中を見回しヴィルとルーンが抱き合っているのを見て安心したように小さく笑い部屋を後にしたのであった。

翌日、ヴィルとルーン、そして何人かの侍女は馬に乗り城を出ようとしていた。
「いいかい？ルーン。このヴェールを僕や侍女意外の人がいるところではずしてはいけないよ？」
「どうして？」
ヴィルは小さい声で答えた
「どうして・・・って・・・。君は、その・・・見た目がとても可愛い・・・から・・・あんまり他の人間に見せたくないというか・・・」
ヴィルからそんな言葉を聞きルーンは頬染めて聞き取れなかったように聞いた。
「え？」
「いや、なんでもない。君は見た目が可愛いからね。いろんな人が君を見て誘拐などされては大変だからだよ。」
何事もなかったように話す内容をかえたヴィルだった。
ヴィルはルーンを馬に乗せるとまた自分はルーンを抱きしめるように後ろにまたがり手綱を掴んだ。

そして侍女の乗った馬を連れラングール国へ向かった。

その日の夜野宿することにしたヴィル達は焚き火をしヴィルはルーンに侍女と寄り添って寝るように言うがルーンは言うことを聞かず、ヴィルの肩に頭を乗せるようにして横に座った。

それに驚いて閉じていた目を開けたヴィルは

「！？ルーン！？侍女と一緒に寝ないとだめじゃないか・・・。まったく仕方のない子だね。」

そう言うと自分の肩にかかっていた毛布の半分をルーンにかけてあげるのだった。

次の日の朝、またルーンはヴェールをかぶり馬に乗り自分を抱きしめていう状態で馬の手綱を掴んでいるヴィルとその後ろから馬に乗ってるいてきている侍女とラングールへ向かっていた。

もう日が落ちようとしていた時ヴィルが馬を止め言った

「ルーン降りてついてきてごらん。いいものを見せてあげるよ。」

そう言いルーンの手を持ち馬から下ろすとそのまま手をつなぎ丘の方まで歩きだした。

丘のてっぺんまで登って見た光景にルーンは驚きの言葉を出した

「わぁ！！すごい綺麗！」

そこには緑豊かな森や花畑が一面にあり少し遠いところには綺麗な水の川が流れていたそしてその真ん中には大きな塀に囲まれたとてもにぎやかそうな町がありその真ん中には今までルーンがヴィルと一緒にいた城より何倍も大きく美しい城が建っていたのだ。

「ここが僕が生まれ育った国ラングールだ。去年、兄上が変わられてしまう前は今よりもっと美しかったよ。」

そう言いながらヴィルは微笑んでいた表情を段々濁らせていった。

城に着くとヴィルとルーンは1つの部屋へ通された。しばらく部屋の中を眺めているとノックの音がして一人の男性が部屋に入ってきたルーンはヴィルに言われ隅のほうにある椅子に座り紅茶を飲んで

いた。
目の前の大きな椅子にはヴィルがその前の大きな椅子には入ってきた男性が座ってなにやら難しそうな表情で話をしていた。
話が終わり男が席と立つと
バーン！！！
という音をたて扉がいっせいに開き兵が剣を構え部屋に入ってきた、そしてヴィルと男を囲んでしまった。兵がヴィル達を囲むと一人の男の人が入ってきた。その人はどこか雰囲気がヴィルと似ているようだった。すると
「兄上！？」
（え？兄上・・・って・・・えええ！！！あの人がヴィルのお兄さんなの！？）
驚きに目を見開くと
「久しぶりだなヴィル。元気にしていたか？」
「はい。兄上もお元気そうで何よりです。」
ヴィルがそう言うと一瞬、フッ、と微笑んだかと思うと
「ヴィルあるものの証言によりお前が私を殺そうとしていることを知った。よって牢に追放する。」
「な！？私が兄上にそのような事をするはずあるわけないでしょう！」
「黙れ！お前の意見は聞かん！連れて行け！」
マーリフがそう兵に命令すつとこを見たルーンはすぐさまヴィルの前に立ち
「待って！ヴィルを連れて行かないで！」
それを聞いたマーリフは後ろを振り返りルーンの姿を見て一瞬目を見開いた
「ほう？お前はヴィルの恋人か何かか？美しくめずらしい髪と瞳をしているな。」
そう言われルーンはヴェールをはずしてしまっていることに気づき後ずさった。

「ルーン！僕は大丈夫だから離れるんだ！」
ヴィルは兵に腕を掴まれ床に倒れた状態になりながらルーンにそう叫んだ。が遅かった。
「女、ヴィルを助けてほしければお前が俺の元へ来い。そうすればヴィルは放してやろう。」
「な！？何を言うのです！兄上！」
「何を心配しておる？恋人を取られるのが心配なのか？案ずるな暇を持て余しておる妃達の話相手にするだけよ。さぁ女・・・いや、ルーンと言ったか？どうする？ヴィルを助けてほしいのであろう？」
（ヴィルを放してくれる？放してもらえればヴィルは計画を実行できる・・・ヴィルの手助けができる！）
「行き・・・ます。」
ルーンは怯えながらに返事をした。

そのままルーンはルーシフに連れられ後宮を後にした。
兵がルーンを連れていくのを黙って見ていたヴィルは
「なぜバレた！計画は完璧で今ここにいる者しか計画のことは知らないはずだ！くそ！ルーンを助けなくては・・・！」
そう言い部屋を出て行こうとするヴィルを男と侍女達が止めた。
「お待ちください！今行ってはまた捕まってしまいます！」
そう言いながら男はヴィルの腕を掴んだ
「離せ！ルーンをあのままにしてはおけない！！」
「ルーン様のお気持ちもお考えください！」
男がそう言うとヴィルはハッとしたように一瞬体を揺らした。
「だが今の兄上は尋常ではない、手はださぬと言ってはいたがいつ気がかわるか分かったものではない！」
「それでも貴方様まで捕まってしまわれては計画を遂行することができなくなってしまいます！ルーン様もヴィル様の事を思い計画のためにと自らの意思で陛下について行かれたのですよ！」
そこまで言われヴィルはやっと触っていたドアノブを離した。
（計画を進めつつ必ずルーンを助ける！待っていてくれ！ルーン！！）

その頃ルーンはルーシフ率いる兵とともに後宮を離れた王宮の通路を歩いていた。
すると、赤茶色の扉の前まで来ると兵に何やら話をしてルーンと兵をその場に置いて王は去って行った。
王の姿が見えなくなると兵の一人が扉を開けルーンを歩かせ中に入って行った。
扉の中は部屋ではなくまた別の通路が続いていた。そこを兵と共にしばらく歩いていると、今度はとても綺麗な装飾品で飾られた扉の

前で止まった。すると今度はいきなり扉が開き黒いフードをまとった男性のような女性のような印象を見せる者が開いた扉の前に立っていた。それを見たルーンは怖くなり後ずさりするが兵は容赦なくルーンの背を押した。
フードをかぶった者にルーンをまかせると兵は扉より先に入らず、扉は閉まってしまった。
ルーンが怯えながらに回りを見渡していると
「この扉より先は王から許しをえた男しか入れない。心配しなくていいよ。あと、私も女だからねそんな怖がりなさんな。」
フードをかぶった者からそう言われてもやはりルーンは怖いのかあまり態度をかえなかった。
扉の中はまた通路になっていて通路の真ん中には光がさした中庭があり、魔界では見たこともないような花が咲いていた。
通路には色々な扉がありルーンはそのうちの一つの扉の前へ連れて行かれるとフードをかぶった女性は扉を開けた。
中は大きな部屋になっていて綺麗に着飾った女性達がルーンを迎えいれた。
「まあ！かわいい子が来たわね。髪なんか見たこともないような色だわ！」
「あら若い・・・お肌なんかピチピチね・・・」
女性はそう言うとルーンの肌を触り自分のそれと比べ、ため息を吐いた。
「あなたどうしてここに？もしかして・・・あなたも妃になったの？」
ルーンの傍までやってきた女性達はいろいろな話をルーンの周りでしだした。それにルーンが困っていると
「この方は第二王子ヴィル様の恋人だそうです。妃様達の話相手にと陛下からここに連れて来るようにと仰せつかってまいりました。」
と、ルーンの後ろ扉の傍に立っていたフードをかぶった女性が言った。

「あら、そうなの？じゃああなたは敵ではないのね？あ～安心した～。」
「ヴィル王子って言うと離宮に行ってしまった方よね？こんなかわいらしい恋人を作るなんてやるわね王子様も。」
と、着飾った女性達は安心したような口調でルーンにまた近づいてきた
「あなた本当に綺麗な髪してるわね、しかも一本一本細いし糸みたいじゃない、どうやったこんなに美しくなるのかしら？」
「そうよね～私達なんかどんなに頑張ってもこんなには綺麗にはならないわよね～」
「あらやだ！瞳の色もきれ～！空の色に少し黒がかかってるわね。あなた生まれはどこ？親は？どうしてこんな身なりしてるの？」
「ねえ、ヴィル王子ってどんな方？かっこいいの？」
「ヴィル王子とは一体どうやって出会ったの？」
とたくさんの女性がルーンの周りにやってきて髪を触りまくり肌を触りまくりその後ろからまた新しい女性がやってきては質問してきたり前の人がまだ触っているルーンの髪をひっぱったりするのでルーンは痛くて泣きだしそうになってしまうと
「皆さんやめてさしあげて、怖がってますわよ。」
少し大人びた、そして冷静とした女性の声が部屋に響いた。
ルーンの周りにいた人達が一転を見つめているのでルーンもみんなが見ているとこを見るとそこには長椅子で寝そべりながら煙管を吸っているとても綺麗な黒髪黒い瞳の綺麗な女性がいた。
「正妃様・・・。」
女性達がそう言いルーンはやっときづいた。
あの女性こそが正妃様なのだと、あとの女性達は妾にあたるのだということを知った。
「怖がらないで黄金色の綺麗な髪を持つお嬢さん、怖がらせてごめんなさいね。私たちはずっとここから出ていないからあなたのような人が来るとついはしゃいでしまうの。そうね・・・皆さん、今日

は彼女の歓迎会をいたしましょうか。」
正妃様がそう言うと
「そうですね！しましょうしましょう！新しい仲間の歓迎会ですわ！」
と一人が言い
「それでは侍女に言って食事などを準備させましょう！」
別の女性がそう言うと扉の前にいる侍女の元へ行き何やら話をしていた。
その間にルーンの傍までやってきた女性が
「それではこれからよろしくね。私の名はアリア。」
「私はクルセ！」
「私はブデュールよ。」
「私はマクセ」
と次から次えと自己紹介をし始めるが３０人以上もいる女性の名前をいっきに覚えるのは無理だった、そんなルーンを見た女性達は曇った表情をしだすが
「皆さん、その方はまだここに来たばかり。そんな一斉に名前をおっしゃっても分からないのは仕方ありませんわ、ゆっくり覚えていけばいいだけの話です。」
と正妃様が言うと女性達の表情が明るい物へと戻るのが見てとれた。

その日の夕刻、女性達とルーンがいた部屋には大きなテーブルが出されそのうえにはたくさんの食事が出された。女性達は色々な話をしながら食事をしていたがルーンは
（ヴィル、今頃どうしてるのかな・・・・会いたいな・・・）
そう考えているうちに涙が出てきてしまったのでルーンは席を立ち部屋を出た。
そして、部屋に行くときに見かけた中庭の方へと歩いて行き中庭にある花の絨毯の上に座りこむと両手で顔を覆い泣きだしてしまった。
すると

『・・・んで・・・・い・・・・ているの？』
一瞬聞こえた言葉にルーンは顔を覆っていた手をどけるが声の主はどこにもいない、不思議におもっていると
「どうして泣いているの？」
今度ははっきりと聞こえたと思い後ろを振り返ると中庭を出た通路の柱の闇の中に小さい子鬼のような子がいることに気がつきルーンは驚いた
「あなたはだあれ？」
ルーンがそう尋ねると
「私はマルセス。この王宮の闇に住んでるの。あなたは・・・魔界の住人？」
そう問われ
「うん。私の名はルーンよ。よろしくね。」
ルーンがそう言うと子鬼は慌ててお辞儀をした
「ル！ルーン様！？ルーン様と言えばもしかして姫様ですか！？もうしわけありません！知らなかったとは言えため口を使ってしまって！」
そういながら頭を下げる子鬼にルーンは頭を上げるように命令する。
「頭をあげて、私は確かに姫だけどここは魔界ではないわ。だからそんな改まらなくてもいいのよ。私のことはルーンと呼んでちょうだい。」
そう言うと子鬼はおずおずと頭をあげた。
そして
「あの・・・ルーン様・・・ルーンは、本当に何故泣いていたの？」
そう聞かれ、ルーンは正直に何もかもを子鬼に話した。

魔界の姫と緑園の王子

人間界に来てしまう前にあったこと・人間界に来てからの事・ヴィルと出会ってからのこと・ヴィルノ事を愛している事。
「ルーンはその人の事が好きなんだね。でも、それなら何故彼から離れてこんなところにいるの？」
「ヴィルのお兄さんが去年から豹変して別人になっちゃったらしくてそのせいで国が乱れてきてるから、そのお兄さんをどうにかするためにヴィルと戻ってきたんだけど、お兄さんにそのことがバレて殺されそうになったヴィルを私が付いてくることで殺されずにすんだの。」
ルーンは瞳に涙をためて話した。
「そっか・・・まぁ仕方ないよね。王様に悪魔が憑いてる事は誰も知らないし・・・」
子鬼のその一言を聞いたルーンは驚き尋ねた。
「え！？王様に悪魔が！？」
「うん。でも安心して。人に憑依しないと活動ができないくらい弱い悪魔だから」
どこを安心すればいいのかわからないけど・・・それなら話は早い。ルーンは魔界の姫だ。ルーンが名乗って前に出ればその悪魔は即座に言うことを聞いて王から離れるはずだ。
でも、ひとつ不思議なことがあったのでまたもルーンは子鬼に尋ねた。
「ねぇ、悪魔はどうやって王様に憑いたの？」
「私は普段王宮のいたるところにある闇の中に住んでいるの。去年くらいに倉庫の闇で寝てたら扉が開いた音がして、扉の方を見たらいつもなら後ろに護衛を何人か連れて歩いてる王様が立っててね。そのまま奥に入ってきて棚に置いてあった水鏡を除いてたの。その水鏡にはどうやら悪魔が憑いてたみたいで、そのまま王様の身

体に入っていったの。」
その話を聞いたルーンは自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。もしそれが本当ならヴィルは王が悪魔に憑かれていることを知らず殺そうとしていることになる。
（ヴィルを止めなきゃ！）
ルーンは子鬼をその場に残し走り出した。すると
ドン！「きゃっ！」
誰かに思いっきりぶつかり尻もちをつきそうになったがぶつかった人がルーンの腕を掴んで引っ張ってくれたので尻もちをつかずに済んだ。
「おや、これはちょうどいいところにルーン様。今呼びに行こうと思っていたところです。」
そこに立っていたのはフードをかぶった女性と一人の兵だった。
「ルーン様、陛下がお呼びです。」
そう言い兵に視線を送ると兵はルーンの腕を掴んだまま、一つの部屋へと連れて行った。
その部屋には数人の侍女がいた。侍女達はルーンを風呂に入れ、髪を洗い、身体を洗い、露出度の高い寝着を着せ部屋を出て行ってしまった。
意味がわからずルーンが首をかしげていると部屋の扉を誰かがノックした。部屋に残っていた一人の侍女が扉を少し開け外にいる人を見て
「陛下のおいでです。」
その言葉を聞いたルーンはまたもや顔から血の気が引いた。
王は部屋に入ってくると侍女と護衛に部屋の外に出るように促した。扉が閉まると王はルーンに近づき腕を掴んだ
「な！何もしないという話だったじゃない！」
「気がかわったのだ。ヴィルの悔しげな顔が見たくてな。」
そう言うなり嫌がるルーンを抱き上げ寝台に乱暴に下ろすとまたもや腕を掴み動けないようにされた。

ルーンは自分が魔界の姫である事を言おうとすると
「あまり声を出すなよ？」
と言い王の瞳が一瞬光ったと思ったらルーンは声を出せなくなっていた。
その後王はルーンの腕を掴んだまま肩に顔を埋めてきた。
（い、嫌・・・いやぁぁぁぁぁ！！！！）
心の中で叫ぶと同時にルーンの身体からまばゆいほどの光があふれ出しルーンの上にまたがっていた王は一瞬にして飛ばされ壁に激突した。
ルーンは魔法を使えると言ってもまだ上手く扱うことができず強く念じてしまうと体が反応してしまうのであった。
王はうちどころが悪かったのか少し呻いた後立ちあがり
「お前・・・何者だ。魔法が使えるのか・・・そうか・・・フフフ。」
そう言うと懐から宝石を取り出しルーンに向けてかざした。すると宝石から光が出てきてルーンがまぶしく目を瞑り次に目を開けた時には宝石の中に閉じ込められていた。
言葉も話せないままなので助けを呼ぶこともできなかった。
すると外から声だがしてきた
「あんたその方がどなたなのかわかってそんなことしてんの！？ルーンを離しなさいよ！！」
この声は・・・マルセス？
ルーンは王の指と指の間から宝石の外をのぞいた、王の足元にはマルセスがいた。
「この者を助けてほしくばこれをヴィル王子に持っていけ。居場所は匂いでわかるだろう。」
そう言いバサっという音がその後にした。なんの音なのかはルーンにはわからなかった。マルセスは王から託された物を持って駈け出して行ってしまった。

その頃ヴィルは。
（準備は整った。後は明日謁見の間にて計画が上手くいけばそれで・・・。ルーンは無事だろうか、もうすぐ・・・もうすぐ助けるからな！ルーン！）
ヴィルは窓の外の覗いていた。
すると何かにズボンの裾を引っ張られた事に気がついた。
「なんだ？誰かいるのか？」
そう言い後ろを振り返るが誰もいなかった。
気のせいかと思いまた窓の外に視線を送ると
バサッ！ゴン！！
「いてっ！」
何かがヴィルの頭の上から落ちてきて直撃した。
「なんだ？これは。」
巻物だった。中を開いてみると
「な！？なんだこれは！？」
巻物の中には絵が描いてあり、それはまるで生き物のように動きまわっていた
「これは・・・兄上か？兄上の手に何か・・宝石だな・・・宝石の中に誰かいる？ルーン！？何故ルーンが宝石の中にいるんだ！？兄上が立っているのは岩？丘だな・・・ここは見覚えがあるぞ、東にある川の上かあそこは確か流れが激しく、川に落ちた者で生きて帰ってきたものはいない・・・兄上はそこで何を？・・・もしや！？」
ヴィルが見ている巻物の中にいるマーリフ王は川の上の丘まで来ると宝石を持った腕を上に上げ宝石を川に落とそうとしていた。
「これは・・・一体なんなんだ？今なのか？それとも・・・・」
（考えてる時間はない！）
ヴィルは走り出し部屋の外へ出ると、そこにはちょうど侍女がいた
「ヴィ、ヴィル様！？どちらへ行かれるのですか！？」

「少し外に出る！明日の朝までには戻ると伝えておいてくれ！」
そう言うとヴィルは外に走って行き馬に乗り東の丘に向かった。

（一体どこまで行くのかな？）
ルーンを閉じ込めた宝石を持った王はどこかを歩いていた。周りには風の流れる音がする
（外？外に何しにいくのかな？）
ふと、そう考えた時に
「見よ。この川を。さぁてヴィルはどんな顔をするか、楽しみだな」
と王はルーンの入った宝石と人差し指と親指で持ち川の上に掲げた
（な、何この川！？流れが速い・・・もし落とされたら上がってこられないだけじゃないわ宝石が割れちゃうかも！）
と、その時王の背後から声がした
「兄上！お待ちください！」
「おや？ヴィルじゃないか？こんなところで何をしているのかな？」
ルーンは王の言葉を聞き来た方の道を見ると馬の手綱を握り馬から降りたヴィルが立っていた
（ヴィル！！）
「兄上、あなたこそここで何をしているのですか？その宝石をどうなさるおつもりですか？」
「風に当たりにきただけさ」
「その宝石の中にはもしや、ルーンがいるのではありませんか？」
「さぁ？確かめてみたらどうだ？」
王はそう言うとルーンの入った宝石を掴んでいた人差し指と親指の力を抜き、宝石を川の中へ落とした。
ルーンは水の中に落ちる間に覚悟を決め目を閉じようとしていた、かすかに覚えているのはヴィルが自分を追って川に飛び込んできたことだけ。

（うぅ・・・ここは・・・？え！？ヴィ、ヴィル！？ヴィル！！）
ルーンが目を覚ますとそこは川を少し流れた先にある岩の上だった、ルーンはまだ宝石の中にいた宝石の前にはヴィルが倒れていた。ルーンは宝石の周りを見たが傷がついていなかった
（ヴィルが・・・追いかけて来て宝石を掴んでくれたんだわ・・・だからヴィルがこんな・・・ヴィル！お願い目を覚まして！ヴィル！！）
出ない声を一生懸命に出しヴィルを起こそうとするがヴィルは目を覚まさなかった。と思ったら
「う・・・・・。」
（ヴィル！）
ヴィルは呻いた後身体をゆっくり起した
「は！？ルーン！？ルーン平気かい！？」
ヴィルは宝石を自分に近づけ中にルーンがいることを確かめた
「あぁ・・・ルーン無事で良かった。どうして宝石の中に入れられてしまったんだい？というか、どうやって？」
（言いたいけど言葉が・・・）
とその時
『人間、何故我が娘は宝石の中に入っている？』
ヴィルの背後から聞きなれた人の声が聞こえてきた。さすがのヴィルも慣れたのか驚いた様子も見せず後ろを振り返ると
（父様！何故ここに！？）
「人間聞いている。何故ルーンが宝石の中にいるのだ」
ヴィルを怒ったような瞳で睨み
「もうしわけありません。わかりません。私の兄がルーンをここに閉じ込めたみたいなのですが、城には魔法なんか使える者はいないはずなのです」
「何？わからないだと？」
そう言うとコルタンは宝石の方に目をやり手を一振りすると、一瞬にしてルーンは宝石の中から出てこられた、そして言葉も話せるよ

うになった
「あ・・・ありがとう！父様！！」
ルーンはそう言うとコルタンに抱きついた。
「礼を言われる覚えはない。当然のことをしただけだ。そんな事より、やはりお前を弱い人間の傍に置いておくわけにはいかんな」
（あ！そうだった。父様はヴィルと私との事まだ完全に許してくれてないんだった！）
ルーンはすぐコルタンから離れ
「だ、大丈夫よ父様！そ、それに人間の仕業じゃないもの！」
ルーンはそう言うとすぐヴィルの方を向くと
「ヴィル大変なの。王様には悪魔が憑いているわ。」
コルタンの力を見て驚きのあまり声も出せていなかったヴィルはそれを聞いてやっと声が出せるようになった。
「な、なんだって！？なんでそんな事知ってるんだい？ルーン」
「マルセスに聞いたのよ」
「マルセス？」
ルーンはヴィルと別れた後のことを全てヴィルに話した
「それじゃあ、そのマルセスっていうのは王宮の闇に住む子鬼でそいつの話じゃ悪魔は水鏡の中から兄上に憑依したんだね？」
『そいつとは何よ！そいつとは！』
どこからかまたも、聞きなれた声がすると思ったら
ポンッ！という音とともにマルセスがルーンの頭の上に姿を現しコルタンに礼をした。
「マルセス！？何故ここに！？」
「え？マルセスがいるのかい？どこに？？」
（あ、姿見えないのね・・・）
「ここよ。こ～～こ！」
そう言うとマルセスは楽しそうにヴィルの足の裾を蹴飛ばした
「あいた！！そ、そういえばさっきも似たような事があったな・・・もしかして巻物を持ってきてくれたのはマルセスだったのかい？」

「「そうだよ」って言ってるわ」
「ありがとう。マルセス。」
ヴィルが礼を言うとマルセスは自慢するかのように胸を張っていた。
それを見たルーンは少し微笑んだ後に質問した
「マルセスなんでこんなところにいるの？どうやってきたの？」
「いや～丘に行くまでは王子の服にしがみついてたんだけどね？いくらなんでも川には付いていけないからさ上空で見てたんだよ。ルーンの事が・・・心配でさ」
「ありがとう。マルセス」

魔界の姫と緑園の王子

「ルーンの為だからな！！」
マルセスはまたも胸を張った。
「それでヴィル、マルセスの話だとどうやら王様は去年ある日、悪魔に誘導されてか倉庫に一人で行って棚に置いてあった水鏡を手に持ったら
それに封印されていた悪魔が王様の身体に乗り移ったらしいの」
「もしそれが本当なら・・・兄上自信は悪くないと言う事か？・・・・
それじゃあどうやって救えばいいんだ・・・。」
ヴィルは顎に手を置き考えだした。
「ヴィル忘れたの？私は魔界国第一王女ルーンなのよ？」
「そうか！ルーンに逆らえる魔界の者は魔王様ただ一人だからね！
でも・・・、本当に平気かい？今まで閉じ込められていたし、それにとても危険な事に変わりはない・・・。」
ヴィルがそう言うと後ろにいる魔王も似たような事を言いだした。
「そうだぞ、ルーンよ。人間界にいたっていい事は１つもない。人間はお前を守れない。お前がその男を守ってどうするのだ。魔界城にいれば今までどおり幸せに暮らしていけるのだぞ？」
魔王のその言葉を聞きルーンはある事を考えた。
「では、父様？こうしてはどうでしょう？ヴィルと私が魔界城に住む・・・というのは？そうすれば私は父様と約束しましょう。ヴィルが生き続ける限り私は魔界城から父様の許し無しで外には出ない。そのかわり、ラングール国現王マーリフ様に憑いている悪魔は父様が御処分ください。」
「我が城に人間を連れて行けと申すのか？」
「はい、ヴィルがそれでも構わないのなら・・・」
ルーンはそう言うと視線をヴィルに向けた。ヴィルは。
「僕は構いません。ルーンと一緒にいられるのなら」

「まったく・・・頑固な娘を持ったものだな・・・。いいだろう。お前が危険な目にあうよりかましだからな。」
「ありがとう！！父様！！」
ルーンはそう言うとコルタンの首に手を回し抱きついた。
「礼を言われる事をした覚えはないな」
コルタンがそう言うとヴィルが話を切り出した。
「では、王宮に帰ろう？ルーン。明日の朝謁見の間にて各国の王を招いた会議がある。チャンスはおそらくその時しかないだろう」
コルタンはそのまま何も言わず、何もないひずみの中に姿を消した。ルーンとヴィルはそのまま丘の上まで登りそこに止めてあった馬の背に乗り城に向かった。
城に帰ると侍女がヴィルの元へかけてきた
「まあ！ヴィル様！？そんなに濡れてしまって！ルーン様もご無事でなによりですわ。ただ今、湯の準備をいたしますね。」
そう言うと自分の後ろからかけてきた他の侍女に湯の準備を言い、本人はヴィルとルーンを部屋へと連れて行ってくれた。

翌朝、謁見の間には各国の王が集まり自分達の席につき話しあいをはじめようとしていた。話し合いの内容は
「集まってくれた各国の代表者達よ。そなたたちの国を我が国と合併させたい。もし断るようなら・・・戦争だ。」
ラングール王国は人間界の国で一番範囲と国の面積の大きな国、そんな国から攻め入られては跡かたもないことは王達は百も承知だった。
だが、言葉では逆らう者は山ほどいた
「な、何を言い出すんだ！？戦争だって！？戦争でお互いどれだけの犠牲が出るのかわかっていらっしゃるのか！？」
「そ、そうだ！それに、ラングールは大国だ！そんな国から攻め入られるのを黙って見過ごせるとお思いか！」

たくさんの王が席から達上がり反論を述べていた。
「それでは、戦争・・・でよろしいのか？」
マーリフがそう言うと謁見の間内にはしばらく沈黙が訪れた、そして一人の王が口を開けようとした時。
バーン！！！！！
謁見の間の扉が強く開け放たれた。
各国の王達は驚いたまなざしで扉の方を見やると、そこにはヴィルと不思議な髪と瞳の色をした少女が立っていた。
「おや？ヴィルではないか？どうかしたのか？」
何事もなかったようにマーリフはヴィルに問いかけると。
「兄上、あなたは兄上ではありませんね。あなたには悪魔が憑いている。だからあの優しかった兄上は突然豹変してこの国を壊そうとなさるのですよね？」
「フフフ。何を言い出すんだ。ヴィルよ。昔も今も私はこのままだぞ？お前の目がおかしかっただけではないのか？」
『まだそのような事を申すか。魔族が聞いて呆れる台詞だな。まあ、お前は魔族などではなく下級だがな』
低い声がどこからか聞こえ各国の王達はあたりを見回し始めた。
マーリフはというと何故か青ざめた顔をしていた。
「ほう・・・声を聞いただけでわしが誰かわかったのか。そこらへんは褒めてやっても良いな。」
その声はさっきと違い一つの決まった場所から聞こえてきていた。
各国の王達はその声のするほうを見やると、ヴィル王子の目の前の何もない空間から一人の男性が姿を現した。その男性はヴィルの横にたたずむ少女と同じ髪に少女より少し薄眼の色の瞳をした男性だった。
その姿を見たマーリフはガタガタと震えが止まらなくなっていた。
「な、何故貴方様がここに・・・！？」
「何を言うておる。我が愛娘に最初に手を出したのはお前だぞ。」
「な！？ひ、姫ですか！？一体どこ・・・に・・・も、もしや！？」

そう言うとマーリフの視線はヴィルの横に立つルーンの方へと向かされる。黄金色の髪、王とは違うが少し黒のまじった青い瞳。姫に手を出したとなるとこの女の事しか考えられないとマーリフは思った。

「私は・・・魔界国第一王女ルーン。あなたはこの国の王に憑きとても美しい世界を怖そうとした。もし壊してしまったら魔界と人間界の均衡が崩れ戦争になるでしょう。あなたはそれを起こそうとしました。なので直ちに王の身体から出て、兵とともに魔界に帰り牢に入りなさい。」

ルーンがそう言うとマーリフはガタガタ震えていた足が限界にきたのかその場に座り込んでしまった。

「出てこない・・ということは反発とみなします。衛兵！」

ルーンが叫ぶと何もない空間から頭に角の生えた者、角は生えてなくとも耳が尖っているもの、牙があるものいろいろな兵のような甲冑を着ている男たちが姿を現しマーリフの前に立った。

そして何やら紫水晶を上に掲げ始めた。すると水晶から紫の光が出てきた。その光を浴びたマーリフは頭を抱えて苦しみだした。

「や、やめろぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

叫び声と共にマーリフの身体かわ黒い煙のようなものが出ていった。そこで兵の一人が小さい瓶を掲げると煙は瓶の中に吸い込まれて行った。

「よくやった。下がれ。そしてそやつの処分はのち考える。今は牢にでも入れておけ。」

コルタンがそういうと兵は返事をしてまた何もない空間へと姿を消した。

「ルーン・・・今の水晶は？」

「今のは強い魔力をやどした魔石、魔法を使えない者は大抵魔石を使うわ。使えるとしても強い魔法と弱い魔法があるからあの兵達も魔法は使えるけど強い魔力が必要だったから水晶を使ったの。魔界で強い魔法が使えるのは魔族だけなの」

ヴィルの問いにルーンは詳しく説明した。
「う・・・・・」
そこに玉座のある床で倒れていたマーリフが目を覚ました。
「兄上！！」
ルーンとヴィルは駆け寄った。
「兄上！ご無事ですか！？」
「う・・・・ん？ヴィルではないか？そなたここで何を・・・私は・・・何をしていた？」
どうやらマーリフは今まで自分が何をしていたのかわかっていないようだった。なのでヴィルは今まであったことを全てマーリフに話した。
「兄上の身体に憑いた悪魔は兄上の身体を操り国をだめにしようとしていました。が、ルーンのおかげでなんとか兄上を助けられました。」
ヴィルはそう言うとルーンの肩に腕を回した。
「ルーンとな？だが、何故悪魔の事をこの娘は知っている？」
「はい。実は彼女ルーンは魔界国第一王女なんだそうです。そして後ろにいる・・・あれ？」
ヴィルはコルタンの事も紹介しようと後ろを振り返ると後ろにはコルタンはいなかった。
「ヴィル？」
「あ、ああ。いえ、なんでもありません。」
「そうか。だが、まさか魔界という国が本当に存在するとわな。ありがとう二人とも。私はお前達のおかげで助かったよ。」
マーリフは立ちあがり二人に頭を下げた。ヴィルは慌てて立ちあがりアタフタとしていた
「お、おやめください。第二王子として当たり前のことをしたまでです。」
「いや、私が悪魔に身体をあたえてしまったのが悪いのだ。そうだ！救ってくれたので礼をしなければな。なにがいい？」

それを聞いたヴィルとルーンはお互いの顔を見合い言った。
「それでは兄上。私の話を聞いていただきたいのですが・・・」
「なんだ??」
「私、ラングール国第二王子ヴィルは、この魔界国第一王女ルーンと結婚させていただきたいと思います。そして、私が魔界城にて暮らすお許しをください。」
「結婚!?・・・・・うむ。良いだろう。許そう。幸せになるのだぞ?」
「ありがとうございます。兄上。」
そう言いながらヴィルはルーンと手を繋ぎ謁見の間を出て行った。
そして、空の光を照らして花が綺麗に咲き乱れている庭にルーンを連れて行くとルーンの前で肩膝を地面につきルーンを見上げ言った
「遅くなってしまったし、順番も変わってしまったけれど・・・ルーン。僕と結婚してください。君の事は僕が守るよ。」
ヴィルの口から出た言葉を聞いたルーンは涙を流しながら返事をした。
「は・・・い・・・はい!」
そう言いルーンの唇はヴィルのそれに重なった。

それから二日後、二人の元に魔界の城の兵がやってきた。
「ルーン様!ヴィル様!御迎えに上がりました!」
そう言い何もない空間に手を当てると黄色い光が溢れだした。
二人は手を強く繋ぎ光の中へと入って行った。

その後二人は結婚しやっと安らげる生活が訪れました。
これから波乱が起こるとも知らずに・・・。

魔界の姫と緑園の王子（後書き）

「魔界の姫と緑園の王子【1】」読んでいただきありがとうございます！＾＾ｗ
どうでした？私の初恋愛小説・・・（ドキドキ）
王子のヴィルですが、私の理想の男性そのものを書いてみましたｂ
そしてルーンですが・・・設定的にはド天然＆ａｍｐ；純粋で動物達に愛されるようなまるでお人形のような少女を書いたつもりですｂ
そしてルーンの父コルタンは・・・まあ、親ばか？ｗ的設定ですｂｗ
親ばか・・・的設定ですが、やはりお妃さまを亡くしたつらさに娘ルーンまで失うのはつらい・・・ということで親ばかに見える設定で書かせていただいた・・・という理由もありますｂ

この作品はまだ【1】ですので【2】が存在するかもですよ～＾＾ｗ
この作品を読んでくださった皆様にお礼もかねて【2】の内容をチョビット！話しちゃいますね＞＜
【2】ではなんと！ルーンの従兄弟が登場します。そしてその従兄弟とヴィルのルーン取り合いバトルを考えてます！そしてラストは悲劇が・・・

この先は内緒＾＾ｗ
気になる人は【2】読んでくれると嬉しいな♪

それでは皆様。最後まで読んでくれてありがとです＞＜
またお会いしましょー！＿壁＿ω・、＊）ノ。ｏ○（バィ？？）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4657p/

魔界の姫と緑園の王子【１】

2011年10月8日12時24分発行